
空のラブレター

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空のラブレター

【Zコード】

Z4387BA

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

愛してはいけない恋…そんなものはあるの…?

会いたいよ…新一…

遠い町に引っ越した蘭。理由は新一を愛した責任。愛してはいけないのに愛してしまった蘭に責任を取れと命じた少女。

そして、一年たつて突然蘭の目の前に現る新一…

その次にはあの少女が…

蘭の幸せが遠くなっていく…それを新一は止めることができるのか

…?

案じていた夢（前書き）

わあ、新連載始つました！

案じていた夢

「知つてたの……あいつを愛する」とはできない……って……」

震える声で蘭はある少女を目の前にして言ひつ。

「わかつていたんでしょう? だつたら、どうして…? どうして、彼に近づいたの?」

「そんなの…私にはわからない…」

「私はね、工藤君をあなた以上に愛してる。でもねえ、あなたは愛していなかつたのに突然愛してしまつた…その責任、どうしてくれるので…?」

「あいつの前から消えるから… もう、覚えないと思つから…」

「そうね…なら、早く消えてよ…私は…彼を自分のものにするわ…」

「(めんね…新一…」

チチチチッ、チチチチッ

田覚まし時計の音が私の耳に入つてくる。
あ、起きなきや…

むくつと起き上ると急ぎ足で御飯を作りに行るのが口常。

寝かしつなあ…

夢のことを思い出す。

すいじへ茜っこ思いをしたあの日。

「何で今頃…」

私は、そんなことを思いながらお父さんが起きる前に急いでご飯を作る。

私にはもう必要ないはずよ？今は米花町から離れて杯戸のアパートに住んでいるのよ？

新一を愛しちゃつたから…こんなことになっちゃつたの…

新一は、もう私のことなんて覚えてはいないと思つ。

でも、本当のところ会いたくてたまらなかつた。

彼のあの笑顔が見たくて…

彼の顔が見たくて…

でも、それは願う」とのない思い。

そうだ…

私がいけないんだからね…

でも、もしかしたら案じていたのかもしれない。

私が見たあの夢は、

これから起る」とを案じてこらのかもしれない。

確かにあの夢は過去の出来事。

中学三年生の時のこと。

だから、関係ないと想つ。

でも、案じていたね…

私は
…

もつ一度新一に会えることと複雑な気持ちでいっぱいになる
…

それを案じていたのね
…

案じていた夢（後書き）

感想、お待ちしております！！

再会

いつものように杯戸高校の門をくぐる私。

二年間、ずっと私は友達を作らなかつた。
いや、誰も一緒にはいてくれなかつた。

そりや、少しさは話すけど、一緒にいてくれる友達はいなかつた。

転校生だから……？

それだけ？

でも、私はただ単に友達は作りたくないなかつた。

あの一人しか私は信用できない。

新一を愛してしまつた…だからみんな私のことを無視する。

彼女が言つた言葉はすべての人間が言うことを聞く。

でも、あの二人は違う…

自分の意志を持つていた。

自分が思つていることをすべて言ひた。

私にはないことを持つていた。

だから一人は強かつた。

でも、その二人はもういない…

「ねえねえ！今日、三人も転校生がくるみたいよ！」

え…？

三人も？

多すぎじゃない？

「しかも、同じ学校！イケメンだつたら私の彼にしちゃお！
「私も一つ！」

同じ…学校…

私はその時、変な予感がした…

教室に着くと、私によく話しかけてくれる、山寺さんが近づいてきた。

「毛利さんー今日ね、転校生が来るんだってー」

「知ってる…！三人…って聞いたよ…」

「あ、知ったの～？もうー、そういう情報早いねー！」

「そんなことないよ。今さつき知ったばかり。」

「あ、なんだ…」

つまらなそうな顔。

私はどうせつまらない女。

「おい、みんな席に着けー！転校生を紹介するぞー！」
先生がみんなに呼び掛ける。

生徒たちは一斉に自分の席へと戻つて行くのであった。

気になるな…

その転校生…

「じゃあ、入ってきてくれ！」

先生の合図とともに転校生たちがドアを開けて教室に入ってくる…

私は、その転校生の顔を見て一目で分かった。

きれい、とか、かつこいい、とかじゃない…

三人の転校生に女子は黄色い声、男子は気持ち悪い声を出す。

美女と美男。

「工藤新一と
「鈴木園子と
「富野志保。
「「「よろしく」」」

あの三人は帝丹高校からきたんだ…

私の

幼馴染たち…

再会（後書き）

はい！新一、志保、園子の登場でーす！
これからどんなことになつていいくのか…！？
感想待つてます！

幼馴染達

え…？

どうして…どうしてあの三人がこの学校に…

私は半ば怖くなってしまった。

いまさら三人に顔を合わせる」となんてできない…

私は逃げたんだから…

どんな顔で接すれば…？

私は三人に気づかれないよつてつむく。

どうせ、ばれてしまったのもかかわらず、そうしないとどうも気が済まなかつた。

「じゃあ、上藤はあそこの席。富野はあつか、鈴木はあつか。」

先生がいろんな所を指さしていく。

その指さした先に三人はそれぞれの席へと向かっていた。

お願い…

ひとつに来ないで…

でも、新一が「ひかりさん近付いていく。」

そして、座った場所が私の隣であった。

「…蘭…？」

「…」

何も言いたくない…

どんな顔で答えたらいい?

「蘭…？」

「！」ぬ…ん…なさ…い…」

気付いたら泣いていた。

新一に会えたことがうれしいんじゃなくて…ただ、なぜか泣けてきた…

誰にも気づかれてたくない。

でも、新一には見せてしまった涙。

そつと新一の温かい手が私の頬に触れる。

「泣くなよな…」

優しい声が私の心の奥に届く。

懐かしい声。

いつもこうして私を励ましてくれたよね?

「じめん…じめ…っ」

涙が止まらうとしない私。

新一は、私の頭をポンポンと叩き、

「謝るな。なんか理由があつたんだろう?」

私が勝手に転校したこと…知ってるんだ…

「ちゃんと言えよ。休み時間に聞いてやつから。」

「う・・うん…」

少し落ち着いた私に新一は安心したようにこう笑う。
白い歯が一段ときれいに見えた。

こんなところにひかれていったんだ…

休み時間になると、私の周りに園子と志保が来てくれた。

「どうしてこの学校にいるのよー？」
と園子は何度も言われた。

「や、それは……」

言えるわけない。

彼女に言われてここに来たなんて…

「あのや、話の途中なんだけど、毛利さんとはどんな関係なの？」

途中に山寺さんが三人に質問をする。

「ああ、私たちは蘭の親友よ。」

「は？」

「そして、新一君は蘭の恋人。」

「はあ？！」

「そ、園子！ そんなんじゃないわよ……私は責任をとるために転校したん……！？」

気付いた時には遅かった。

口走つてしまつた…

「蘭…責任つて…」

「つまり、誰かによつて無理やり転校させられたつてことよね？」

「…」

「蘭、誰だ？誰がそんなこと言つたんだ！？」

三人が言うことも仕方ない…

でも、言えないよ…

「言いなさい！」

志保のきつい一言で私はとうとうついてしまつた。

「中原さん……」

「え？」

「中原瓔華さんよ……」

そう、中原さんだ……

彼女に言われて転校した……

彼女が新一のことが好きつていつて……私は彼女に勝てないと思つてた……

そう、幼馴染だから小さいころから好きだった。
それを隠していた。
それは私が悪い……

彼女にこの恋を上げるしかない……

だから責任を取れつて言われてすぐに転校した……。

私は…三人にすべてをはなした…。

あの一年前のことを…

幼馴染達（後書き）

次は蘭ちゃんの過去編です！
感想待ってます！

過去（日常）

「ちょっと、新一起きてよ！」

私は毎日新一の家に行って新一を起こして新一用の朝ご飯を作る。新一は私の料理をおいしそうに食べてくれる。

それがとてもうれしかった。

小さいころからの満面な笑顔を私に向けてくれることがとても嬉しかった。

その笑顔が大好きで大好きでしかたなかつた。

学校に行くときもどこかへ行くときも、いつもいつも私は新一の隣を歩いていた。

私にとってそれは一番いい場所であった。

「ねえ、新一、今日の夕ご飯何がいい？」

「あー……ううん……蘭は今日うちで食べるのか？」

「え……いいの？」

「ああ、面倒だろ？ いちいち通うの。」

「あら、結構優しいじゃない……？」

「わりーかよ。」

「べつにー。それで？ 何がいいわけ？」

「蘭のお好み。」

「んじやーね……新一の好きなものと言えば……ハンバーグ……かな？」

「ん！ それがいい！」

子供みたいにはしゃぐ彼が好き。

「じゃあ、ハンバーグね。」

「よつしゃあ！」

嬉しそうに言う彼が好き。

そう私は新一の何もかもを愛してしまった。
大好きで大好きで…

やつ、あのときだって…

「…つーつ？」

私が携帯電話を落とした時。

「蘭？」

一番最初にわかつてくれたのが新一だった。

新一が私の携帯電話を覗き込むと、お父さんの声が聞こえていたら
しい。

『毛利さん…？毛利さん…？』

「あのー、どちら？」

『米花総合病院の者です！あなたは…？』

「毛利小五郎の知り合いですが…」

『えつと…実は先ほど毛利小五郎さんが車にはねられてしまったん
です…！それで、娘さんに来ていただこうと思いまして…』

『車に…！？わかりました！すぐに行きます…』

『はい…』

新一は私を押さえながらも先生にすべてを伝え、病院へと向かつて
いった。

新一も一緒にいてくれた。

たくさんたくさん励まされた。

そして、お父さんは一命を取り留め、今ではすっかり元気であるー。
なにもかも、新一のおかげ。

そつやつて私は幸せな日常で暮らしていた。

彼女が来るまでは…

過去～日常～（後書き）

さあ、次回、彼女が転校生として…！
感想待つてます！

過去／彼女／

「えー、今日からこのクラスにはいる、中原瓔姫さんだ。」

先生の紹介に男子が騒ぐ。

美人…！

私も思う。

男子が騒ぐの無理はない。

「新一、彼女、可愛いよね！」

私が隣にいる新一に耳打ちする。

新一はブツとした顔で

「そーかあ？俺には可愛いじぶりつこにしか思えねーけど…」

「新一って変ね。」

「つるせー。」

でも、内心ホツとしてたりする。

彼女のことが好きだつたらどうしようつて考えてた。

だって、彼女に勝てるわけないじゃない。
かわいいし…

そうして、ホームルームが終わって授業へと時間は進んでいった。

彼女の席は私の後ろ。

彼女が私によく質問してきたの。

「ねえ、あなたの隣にいる人ってカッコいいわね！」

「え…？ 新一が？」

「へ～、呼び捨てなの？」

「うん。幼馴染だからね…」

「へえ…」

一瞬だけ、彼女の眼が光ったような気がした。

なぜか私は背筋が凍るような気持を味わった。

なぜだろう？

授業は終わり、休み時間になると、私は彼女にいろいろと質問をした。

「私、毛利蘭つていうの…よろしくね！」

「よろしくね。」

「中原さんつてどこから来たの？」

「大阪よ。」

「え？ 大阪？ でも、関西弁じゃあ…」

「大阪つていつても、東京から大阪に行つてまた東京に戻つてきた

の。」

「どこの高校？」

「改方学園。」

「え！？ 改方！？」

「何？ 誰か知つてる人がいるの？」

「ええ！ 遠山和葉ちゃんと服部平次君！」

「ああ、彼女たちなら知つてる。服部さんつて結構な有名人なんですつてね。」

「服部君は高校生探偵だからね。」

「あら、あなた、服部さんのことをよく御存じなのね。」

「新一とよく一緒にいるもの…」

「ふうん…」

「中原さんつて好きな人いないの？」

「いるわ。」

「え？！ 誰誰！？」

「秘密にきまつてるじゃない。」

そつけない返事が案じていたのかも…

彼女は悪だつた。

完全な悪だつた

過去～彼女～（後書き）

はい、ちょっといいで区切らせていただきます！！

過去へ離れるへ

それから彼女が来て一週間が過ぎた。

彼女は親しみやすく、みんなに人気であった。

「なあ、蘭。今日のご飯は？」

「ああ、カレーだよ！」

「ラツキー！」

「ただし、サラダもきちんと食べてね。レーズンも入ってるから。」

「は？」

「うそ。レーズンなんていれません！」

「びっくりしたぜ…」

ホツと胸をなでおろす新一。

かわいいんだから…

「ねえ、毛利さん。ちょっと…」

「中原さん？」

そう、この時だった
…

「あなた、工藤君のことが好きなんでしょう?」

「え! ? あ...いや...」

「私は工藤君が好きよ? 愛してる。」

「...」

「私はあなたのように平凡な人じゃないわ。あなたのようなバカみたいなへらへらしている人じゃないわ。」

「中原...さん?」

「私はねえ、あなたみたいな人が一番嫌い! ばつかみたいであほらしい。」

「...中原さん...」

「とつとと私の前から消えて...」

「そんなの...」

「あ、そつ。なら、あなたのお父さんがどうなつてもいいんだ。」

「え...?」

「私の家のお金をつけば穴のお父さんを暗殺する」ともできるの? ?」

今までのきれいな声はどうへ行つてしまつたのだろう?

私は何も考えられない状態で立ち止まつていた。

お父さんを助けるには...私が...いなくなれば...

「知つてたの……あいつを愛する」とはできない……って……」

震える声……自分でもわかつた。

「わかつていたんでしょう? だつたら、ビラして……ビラして、彼に近づいたの?」

「そんなの……私にはわからない……」

「私はね、工藤君をあなた以上に愛してる。でもねえ、あなたは愛していなかつたのに突然愛してしまつた……その責任、ビラしてくれるので……?」

「あいつの前から消えるから……もつ、念えないと思つから……」

「そうね……なら、早く消えてよ……私は……彼を自分のものにするわ……」

「『めんね……新一……』

私はその後、帝丹高校を後にした
。.

過去へ離れるへ（後書き）

これが蘭の過去でした。
かわいそうな蘭…これから平和な日常が続きます！！
感想待っています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4387ba/>

空のラブレター

2012年1月13日20時52分発行